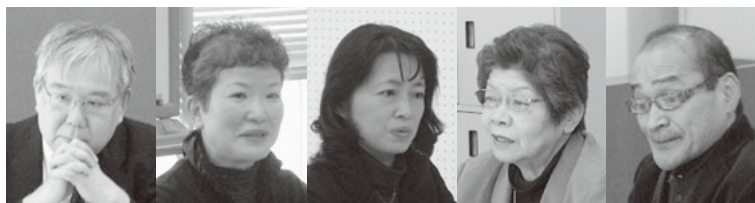


福祉社会をひらく 県社協60年

【連載最終回・座談会】 県社協の過去、現在、そして未来へ

本会が創立六十周年を迎えたことを期に、今年度の連載では、現在の取り組みの土台となる歴史や事業について、時代やテーマを区切って振り返ってきました。そこで今号の特集は、連載最終回として、特にこの二十年に焦点をあて、本会と活動を共にする皆さんをお招きし、これまでの協働の取り組みを振り返りつつ、今後の本会への期待をお話いただきました。



<出席者> ※写真右から

- ▶(N)神奈川県障害者自立生活支援センター事務局長 鈴木治郎さん
- ▶本会かながわボランティアセンター元所長 高島さち子さん
- ▶(福)伊勢原市社会福祉協議会局長補佐 和田百合さん
- ▶(福)吉祥会 寒川ホーム施設長 三澤京子さん

<コーディネーター>

神奈川県立保健福祉大学 社会福祉学科教授 臼井正樹さん

県社協を活用した取り組み、 そこから得られた経験がある

鈴木 県社協の歴史は、自分が生きてきた時代かと思えます。障害者運動の歴史では「川崎バス占拠事件」、そこで登場する「青い芝の会」が強烈に印象的でした。それまでは「行政は敵、社協はその子分」といったところでしたが、国際障害者年を引き金に、いち早く県社協と、ともしび運動が障害者運動を応援してくれた。我々が力をつけたきっかけになり、いい思い出もあります。

そして社会福祉基礎構造改革を経て、初めて障害者自身が主役になったわけです。「障害当事者」とは、利用者主体という言葉から派生してきた言葉ではないでしょうか。自己決定でサービスを選ぶ、そのことが権利として認められたのが大きかった。

ともしび運動が、我々に力をつけてくれた（鈴木氏）
県社協はエネルギーを持った人の集まる場所（高島氏）

たと思います。障害者自身が差別を克服し、社会の中に位置づけられるべきだということと、当事者が自らを一番よく知る専門家なのだという考え方が、価値観を変えました。

これまで我々の先輩・仲間が頑張つて、神奈川県は福祉先進県と言われていました。けれど、どうも最近では全国の実ん中より下かなという感じで、昔のことを知っていると少しさみしい気もします。

高島 私は県社協に四十年余り勤務しましたが、特に精神保健ボランティアには思い出深いものがあります。ボランティアセンターが開所した昭和五十二年、その当時は珍しい毎日型の相談窓口を設けたところ、心を病む方の相談が増え始め、外国を視察した人から話を聞いた関係者らが、精神保健ボランティアをぜひ神奈川県で立ち上げられないかということ、研究会を発足しました。

そうした中で当事者の組織化だとか、「精神保健ボランティア連絡協議会」も生まれてきたわけです。ニーズを発見して、それを組織化し、共有化する委員会を立ち上げる。そしてプログラムをつくり、市町村社協と共に地域展開していく。これほどコミュニティオーガニゼーションの典型的なやり方がある